

■(谷口)与謝蕪村
よさぶそん
徳川吉宗將軍1716＝

俳人，南画家。俳諧で天明中興の巨匠，南画で池大雅と並ぶ大成者と，両面ともに超一流であった。

摂津国東成郡毛馬村で，裕福な農家に生まれる。

早くに両親を失い，

・・・・・・1725＝9歳：

家督を相続せず，

享保大飢饉・1732＝16歳：

・・・・・・1734＝18歳：この頃，江戸に下って，足立来川に入門して俳諧を学ぶが，

・・・・・・1736＝20歳：来川が死去したため，
・・・・・・1737＝21歳：京から江戸に戻った夜半亭宋阿(早野巴人)の内弟子となり，
・・・・・・1738＝22歳：幸町の号で江戸俳壇に出る一方，絵画にも親しむ。また服部南郭の講義にも列席したらしい。
ツツ船出没始 1739＝23歳：以後，次々と句が入集。幸鳥と改号。
・・・・・・1740＝24歳：絵も描いていたが，この頃の「俳仙群会図」は稚拙であった。

公事方御定書1742＝26歳：恩師宋阿に死別するや，俗化した江戸俳壇を見捨てて放浪生活に入り，同門の下総結城の雁宕のもとに身を寄せ，以後，近国や奥羽に旅し，

・・・・・・1743＝27歳：
梅岩没・・・1744＝28歳：宇都宮で処女撰集の「自選歳旦帖」を出して初めて蕪村の号を用い，
徳川吉宗隠居1745＝29歳：俳友晋我を追悼した俳体詩「北寿老仙をいたむ」の名作を成すが，絵の方は，独自の画風をつくれず，

絵は一説に彭城百川に学んだとされるが明らかでなく，狩野派・やまと絵系のほか，中国諸家の作品や版本類を研究し，自己の画風を形成したと考えられる。

徳川吉宗没・1751＝35歳：宋阿門流の多い京に上って，俳諧より画業に心を寄せるようになり，
・・・・・・1752＝36歳：

山脇東洋解剖1754＝38歳：絵画で身を立てるべく，丹後宮津に赴くが，なお凡庸なものに留まり，
この間，四明，朝澹の号で歌仙を巻き多彩な様式を試みている。

源内物産会・1757＝41歳：*丹後の地名から，与謝の姓を用いて，絵画への精進を決意，「天橋立画賛」を残して京都に帰る。

大式政治批判1759＝43歳：「陶淵明図」「牧馬図」，
大岡忠光没・1760＝44歳：「守武像」。
・・・・・・1761＝45歳：長庚，春星の画号を用い，絵による生活も安定したか，結婚して1女をもうけ，
「倣王叔明山水図」で，ようやく，独自の世界が出始め，

・・・・・・1763＝47歳：「山水図屏風」「野馬図屏風」を描き，屏風講時代が始まる。
加賀千代句集1764＝48歳：「柳塘晚霽図屏風」「山水図屏風」では，ほぼ確立されたものになっている。
蘭銭初輸入・1765＝49歳：「何遜堂図」「青楼清遊図屏風」，
忠臣蔵大当り1766＝50歳：「柳溪騎渡図」「茶筵酒宴図屏風」「蘭亭曲水図屏風」。*俳諧にも次第に熱意を示し，すでに嘯山編の「俳諧古選」で「春の海ひねもすのたりのたりかな」が“平淡而逸”と賞されたが，太口，召波ら少数の同志と{三菓社}を結成，「楠の根を静かにぬらすしぐれ哉」などの名句を続々と生み出すと，しばらく田舎にと讃岐に行き，

明和事件・・・1767＝51歳：琴平で「秋景山水図」「山水図」，
久留米藩工事1768＝52歳：丸亀妙法寺の傑作「蘇鉄図屏風」などを描いて，京都に帰ると，俳人より，画家として認められ，
・・・・・・1770＝54歳：俳諧の世界で，衆望に応え夜半亭二世を継承して宗匠の座について後は，
御蔭参流行・1771＝55歳：歳旦帖「明和辛卯春」を出す。「離俗論」の成立もこのころである。画業も大成期に入り，池大雅との合作「十便十宜図」の「十宜図」を制作。

田沼意次老中1772＝56歳：
大原騒動・・・1773＝57歳：俳壇での評価も高まり，大坂の旧国(大江丸)，二柳，伊勢の樗良，尾張の暁台中興期の諸名家が集って，「此ほとり」などの清新な連句も生まれている。

解体新書・・・1774＝58歳：京都周辺の身近な景観の実感を描いた「四季山水図」や「松林帰樵図」などの傑作も生まれた
黄表紙始・1775＝59歳：病氣がちになるなか，
雨月物語刊・1776＝60歳：洛東の金福寺に芭蕉庵を再興，道立，几董らと{写経社}を結んで句会を持つ。
・・・・・・1777＝61歳：俳体詩「春風馬堤曲」「瀬河歌」を収める春興帖「夜半楽」を刊行，「新花摘」の句日記を成し，俳論を代表する「春泥句集」を発表，その序で，俳諧，絵画双方について，去俗論を説いている。

ツツ船蝦夷来 1778＝62歳：*謝寅の落款を用いるようになり，俳句の世界が絵画の世界に結合されて行く。「峨眉露頂画卷」「夜色楼台図」は水墨画史上に残る作品として有名であり，「俳諧物の草画」と自負する略筆淡彩の俳画も完成の域に達し，俳諧ももっとも華やかなる。この頃，集中する芭蕉紀行図巻，屏風の多作は，芭蕉追慕の現れである。
源内獄中死・1779＝63歳：蕪村を宗匠，几董を会頭，道立，百池，維駒，月居らを定連とする連句修行の{壇林会}が結ばれるが，
・・・・・・1780＝64歳：蕪村・几董両吟の「桃李」二歌仙はその成果である。超傑作「鷺・鳥図」も，最晩年の作とみられる。
蘭学階梯・・・1783＝67歳：暁台主催の芭蕉百回忌取越し追善俳諧興行の後援などあったが，宇治田原にキノコ狩に行ったのち病に倒れ，「しら梅に明る夜ばかりとなりにけり」の吟を残して没した。